委託事業実施内容報告書

平成21年度「生活者としての外国人」のための日本語教育事業

【日本語教室の設置運営】

受託団体名　ジェンテ・ミウダ

1　事業の趣旨・目的

外国人集住率が全国で一番高く（総人口の16％強）、その中でも8割近くがブラジル人という大泉町には、外国人店舗なども多く、日本語を使わなくとも生活できる環境ではあるため、カタコトの日本語や単語のみの日本語しか使えないブラジル人も少なくない。そのため、生活の中でうまくコミュニケーションがとれず、お互いに誤解を生じたり、必要な情報が得られないこともある。一方では、離職を余儀なくされた外国人の中には、「安定した仕事に就くためには、日本語を学びたい」というニーズも高まっている。

そこで、日本の歴史や文化をはじめ、生活上・仕事上のエチケットやマナーなど、場面に応じた「ていねいな日本語」を教えることで、日常生活においてスムースなコミュニケーションがとれるような学習を行う。更には、安定した就労にも繋がる語学力を育てることも目的とする。

2　運営委員会の開催について

【概要】

開催日時	出席者	議題	会議の概要
第1回 平成21年5月22日（金） 午後6時～午後9時	ヤン ジョンヨン 堀口小須恵 加藤博恵 栗原健児 渡部フランシス 天野クラウディア	① 外国人に関する地域の状況について ② 事業の進め方について ③ 教室の周知方法等について ④ テキスト等について	同左に関する意見交換、課題整理ほか
第2回 平成21年7月24日（土） 午後6時～30分～午後9時30分	ヤン ジョンヨン 堀口小須恵 加藤博恵 栗原健児 渡部フランシス 天野クラウディア 大谷宏枝（オブザーバー）	① 日本語教室各授業の状況について ・受講者、講師、授業の内容など ・授業を実施している中での課題など ② 今後の進め方について	同上

3　日本語教室の開催について

① 日本語教室の名称:「日本語　はじめの一歩」「日本語大好き」

② 開催場所:ジェンテミウダ校

③ 学習目標:

・ていねいな日本語を使ったあいさつや日常会話をはじめ、地域で生活するために日本人住民と円滑なコミュニケーションがとれるようになる

・日本語を学ぶことで、地域の日本人住民とのパイプ役になれる人材を育てるとともに、安定した生活を営むための日本語能力を身につける

④ 使用した教材・リソース:

⑤ 受講者の募集方法:ポスターを作成し、町内店舗等に掲示するほか、生徒の保護者等を通じて募集

受講者の総数　101人(延べ人数ではなく，受講した人数を記載すること。)

⑥ 開催時間数(回数)　198時間　　(全105回)

⑦ 日本語教室の具体的内容

次の2点を大きな目標として、事業を実施した。

1. ていねいな日本語を使ったあいさつや日常会話をはじめ、地域で生活するために日本人住民と円滑なコミュニケーションがとれるようになる
2. 日本語を学ぶことで、地域の日本人住民とのパイプ役になれる人材を育てるとともに、安定した生活を営むための日本語能力を身につける

また、レベルと具体的な目標のために教室を複数に分け、授業を実施した。

●「日本語　はじめの一歩（ビギナークラス）」

日本語の初歩をきちんと学んだことが無いという外国人に、短期間の中で基礎的、かつていねいな日本語を学習させる。特に「ひらがな、カタカナ」を習得することを目標としたクラス

●「日本語　はじめの一歩（日本語 話す・聞くクラス）」

日本語を話す能力、聞く能力の上達を目的としたクラス。地域生活において更に円滑なコミュニケーションがとれるような日本語を習得することを目標としたクラス

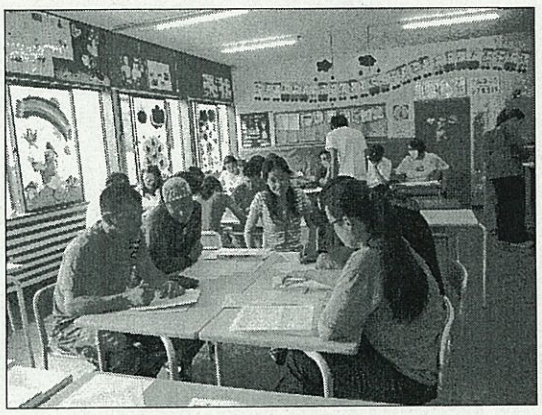
●「日本語　はじめの一歩（ステップアップクラス）」

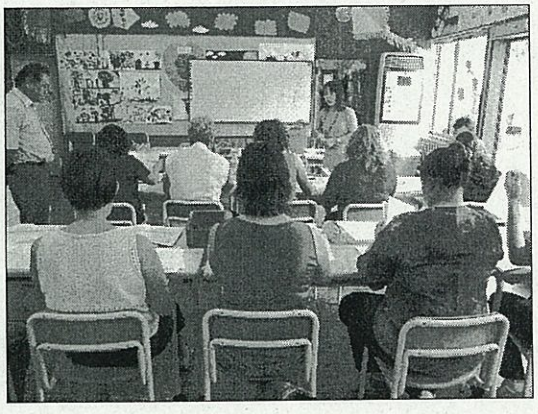
日常会話では困らないが、仕事での資料、子どもの学校の配布物などの日本語に不安を持っている外国人を対象に、日本語会話のステップアップを目的とした学習を進めるクラス

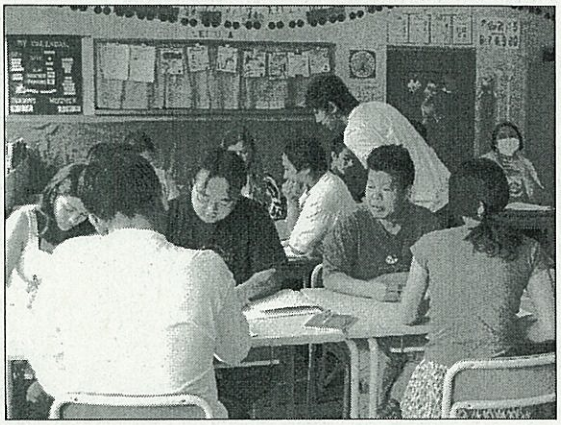
●日本語　はじめの一歩（日本語大好きクラス）」

日本語や日本の文化習慣などを楽しく理解しながら、会話や読み書きの向上を目的としたクラス

⑧　特徴的な授業風景（2～3回分）







4 事業に対する評価について

（1）成果及び評価

① 地域の特色（日系人の集住地域）を活かし、ブラジル人学校で日本語教室設置したことは、初めて日本語を学ぶ受講者にとっても学習に参加しやすい環境を提供したと思われる。

② 経済の悪化から日本語を学びたいと考える外国人は、依然として多い。１クールを６回授業とし、基礎を何度も学べるように計画した。

③ 受講者の中には毎日授業に参加し、熱心に学習に取り組む者もいた。多くの外国人住民が今まで日本語の学習にそれほど時間を割いてこなかったことを考えると大きな変化であると思われる。

（2）課題

＜日本語教育の必要性＞

この地域では1999年の入管法改正以降、出稼ぎを目的とした多くの日系人が定着している。来日してから地域のルールなどを巡り様々な問題が指摘されてきたが、外国人住民は地域にとけ込もうとする姿勢はあまり見られず、翻訳や通訳で対応せざるを得ない状況が続いていた。

しかし、近年の経済悪化で雇用先を失った人は「日本語ができないと、再就職できない」ことを痛感し、日本語学習へのインセンティブが高まっている。また、多くの外国人が帰国した一方で、日本に留まる人も少なくなく、今後の

日本での生活がますます長期化することも予想される中、継続した日本語教育とその充実が必要である。

＜日本語学習の継続と方法＞

① 日本語学習の第１歩を踏み出す外国人は多いが、継続性やレベルアップにおいては大きな課題がある。カタコトの日本語が身につくとすぐに学習を中断してしまうケースも多く、「継続して学ぼう」「さらに日本語力を高めよう」というインセンティブやそのための機会が必要であると感じる。

② 日常において日本語を使用する機会が少ない外国人や、日本語の必要な場面でも通訳や日本語ができる友人等に説明を任せるといったケースが依然として多く、学習で身につけた日本語を使う機会は限られる。
いかに、地域の中で学習した日本語を活かしていけるかが課題。

※写真は，肖像権等に配慮し，差し支えのないものを添付すること。